

関西学院大学文学部総合心理科学科

三浦ゼミ

2018 年度

卒業論文要旨



表紙イラスト: 田淵 恵 (Megumi Tabuchi)

## うわさが実現することが感情及び行動に及ぼす影響

### —「白紙物語」が現実になるとき—

22015307 長谷川凜人

本研究の目的は、不安を喚起させるようなうわさの内容と類似する状況に遭遇した際の、個人の感情状態の変化とそのうわさの伝達意図について、実験室実験により検討することであった。48名の参加者は、「トイレのカギ」または「白紙」に対して不安を覚えるうわさのどちらかを読んだ後に事後調査に回答したが、その際に途中から質問紙が白紙になるような状況を設定した。「トイレのカギ」を読ませた群と「白紙」を読ませた群で、脈拍数、そのうわさの伝達意図、状態不安得点、質問紙の不具合を実験者に申告するまでの時間（以下、申告時間とする）を比較した。結果は、脈拍数は両群で差がなかったが、伝達意図は「白紙」が「トイレのカギ」に比べて高い傾向を示し、状態不安得点は「白紙」が「トイレのカギ」に比べて高く、申告時間は「白紙」が「トイレのカギ」に比べて増加する傾向を示した。また、実験で測定された伝達意図はうわさ実現後のものであったため、本来の伝達意図を測定するための追加調査を行った。その結果、実験での伝達意図の高まりはうわさ実現によるものだと推測された。以上から、うわさが現実になることは、個人をより不安にさせ、伝達意図を高める可能性が示された。

# 欺瞞意図はコミュニケーション中の 強調表現の使用頻度や聞き手の欺瞞検知に影響するか？

22015317 牧野巧

本研究の目的は、嘘をつこうとする意図、あるいは真実を伝えようとする意図が発話中の強調語という言語的な特徴にどのような影響を与えるかを検討することである。またそのような意図を持った発話は聞き手の欺瞞性検知に影響を与えるのか、強調語は欺瞞検知の手がかりとして用いられているのかという点の検討も行った。実験 1 では、他者にある商品をアピールする場面において、質の悪いものを良質であるように伝えるよう教示する条件（欺瞞意図条件）、良質なものを良質であると伝えるように教示する条件（真実伝達意図条件）、統制条件のいずれかに大学生 24 名を割り当て、商品アピール課題を行わせる実験室実験を実施し、アピールの中で用いられた強調語の使用頻度を比較した。その結果、各条件間で強調語の使用頻度に違いは見られなかった。実験 2 では実験 1 で得られたアピールの映像データを大学生 60 名に見せ、「欺瞞意図条件」、「真実伝達意図条件」、「統制条件」のいずれに割り当てられているのかの推測をさせた。実験 2 の結果、このような意図は欺瞞検知には影響を与えていないことが明らかになった。また欺瞞検知の際に、強調表現を手がかりとする参加者はいたものの、その数は多くなかった。これらの結果は過去の欺瞞研究の結論を覆すものではなかった。最後に、課題の適切性などの本研究の問題点を指摘し、今後の強調語に注目した欺瞞研究の展望を述べた。

## Instagram と、承認欲求・自撮り・精神的健康などとの関連

22015329 内山 可南子

本研究の目的は、Instagram が若者にとってどのようなものか、そしてどのように若者に影響を及ぼしているのかを明瞭にすることだった。そのために大学生や、Instagram のアカウントを所持している人を対象とし、オンラインを通じて 3 つの調査を実施した。調査 1 では、Instagram 利用者は Twitter 利用者よりも主観的幸福感が高い傾向があり、男性よりも拒否回避欲求が高い女性は、Instagram においては「いいね」やフォロワーを積極的に欲しがり、投稿頻度も高くなる傾向があった。調査 2 では、女性では自己顕示性と、家族や友人との自撮りの割合に正の相関がみられた。調査 3 では、自分の容姿が好きか嫌いかどうかに関わらず、容姿に関心の高い者が自撮りを多く載せるということがわかった。しかし仮説とは逆に、Instagram への依存度の高さは抑うつには影響しないという結果が示された。これらの結果をふまえ、本研究の調査手続き等の問題点や今後の展開について考察を行った。

## 偽薬効果をもたらす心身状態とパフォーマンスの変化

22015347 田口 宏仁

本研究では、偽薬として炭酸ジュースを、行動指標として計算課題を用いた場合でも、偽薬効果による心身状態とパフォーマンスに影響を及ぼすのか検討することを目的とした。森・坂本（2005）、三雲・高橋（2008）を参考にし、実験室実験を行った。本研究における仮説は以下の2つである。(1) パフォーマンス向上群は覚醒程度が高くなることで計算課題の試行数が増加し、誤答数が少なくなる。(2) パフォーマンス低下群は覚醒程度が低くなることで試行数が減少し、誤答数が多くなる。本研究の参加者はPCにてWEB調査システム Qualtrics で質問紙に回答し、紙媒体で計算課題を行った。休憩時実際にドリンクを試飲したが、その際の教示によって増加群、減少群の2条件にそれぞれ群分けされた。その後再度質問紙に回答し、計算課題を行った。本研究で得られた主な結果は次の通りである。すべての実験条件で心身状態の覚醒は見られず、課題の試行数、誤答数の変化も見られなかった。従って2つの仮説は支持されなかった。偽薬として炭酸ジュースを、行動指標として計算課題を用いた場合に偽薬効果は喚起されないことがこの研究から示された。

# Twitter 上にコミュニティを持つ人における性格特性と アカウント所持の仕方の関連性の検討

22015365 杉岡 莉乃

本調査では SNS の 1 つ Twitter で複数アカウントを作成することでさまざまなコミュニティを作成している人、そして主に共通の趣味を持つ人と知り合った経験のある人は積極的にコミュニケーションをとっているために外向性・開放性・協調性といったプラスの性格特性を持っているのではないかと調査し、検討するために行った。調査では Twitter を現在利用している人を対象に、アカウントを複数所持の有無、趣味アカウント所持の有無、実際に SNS で出会った人と対面経験の有無、Big Five の外向性・開放性・協調性の因子負荷量の高い 5 つを採択し質問を行った。得られたデータを分析した結果、アカウントを複数所持している人は複数所持していない人に比べて外向性・開放性・協調性それぞれの平均値はやや高かったものの、関連があるという結果は得られなかった。また、趣味アカウントを所持しているかと外向性・開放性・協調性それぞれの平均値との関連は見られなかった。この結果により、アカウント所持の有無というところだけに注目するのではなく、アカウントを所持し、実際に SNS を通じて知り合った人と対面したことのある人という調査対象者を狭めた上で、これら性格特性との関連を見ていくことが望ましいだろう。

## 部活動におけるスポーツ指導者の体罰についての調査

22015393 田中 伸治

本研究は、大石・阿江・若山・本村（2014）、萩須・木村（1986）の研究を基に、体育会学生を対象として部活動での体罰経験の有無を、明らかにし体罰が起こりやすい条件と体罰を肯定的に考える条件について検討することを目的とした。本研究における仮説は、以下のとおりである。体罰の経験がある者はない者と比べて体罰を肯定する（仮説 1）。全国大会や地方大会などへの出場回数の多い学生のほうが、体罰経験者の割合が多い（仮説 2）。練習日数、練習時間が長いほど競技力向上を目的としており体罰に肯定的である（仮説 3）。団体競技である部員は個人競技の部員よりも体罰に肯定的である（仮説 4）の 4 つである。調査参加者はスマートフォンにて WEB 調査システム Qualtrics で作成した質問紙に回答した。それぞれの調査参加者に対して、属性、体罰経験の有無、体罰に肯定的であるかを図るものとして 15 項目からなる体罰意識得点を算出し、調査を行った。本研究で得られた主な結果、すべての仮説が支持されない結果となった。しかし、社会問題となっている体罰について 36%の者が体罰を経験している実態が明らかとなり体罰がなくなる背景とその要因について検討を行った。

# 一般的信頼及び性格特性が信頼性判断に与える影響

22015410 正岡大地

本研究の目的は一般的信頼と性格特性が第三者の信頼性判断にどのような影響を与えるのかを検討することであった。具体的な内容は調査対象者に架空の人物に対する情報を提示し、どの程度信頼できるのかを評価させる（これを信頼得点とする）ものである。架空の人物がより信頼できるようになる情報を追加するボトムアップ条件、より信頼できなくなる情報を追加するトップダウン条件を設定して実験的調査を行った。トップダウン条件では、一般的信頼の高い人が正確な信頼性判断を行い、また情報追加に伴い信頼得点を急激に低下させると考えた。ボトムアップ条件では一般的信頼の高い人が正確な信頼性判断を行うと考えた。そして性格特性、中でも誠実性が信頼得点の上昇及び低下に影響を与えると予測した。調査の結果、本研究ではトップダウン条件では一般的信頼の高い人が正確な信頼性判断を行うこと、ネガティブ情報に敏感に反応すること、そして誠実性の高い人が正確な信頼性判断を行うとは言えないことが示された。ボトムアップ条件では一般的信頼の高い人や協調性の高い人が正確な信頼性判断をすることが示された。これらの結果からトップダウン条件で正確な信頼性判断を阻害する要素や、誠実性以外の性格特性が働いた理由など仮説が実証されなかった理由について考察した。



## Twitter 上での自己呈示と性格特性との関連

22015421 齊藤 七恵

本研究は、Twitter のアイコンと性格特性および自己の外見への評価との関連を検討すること、対人不安傾向と自分のアイコンに対する印象、自分が他者に示したい印象との関連を検討することの 2 点を目的として実施した。本研究では調査 1, 2 を実施した。調査 1 においては大学生の Twitter 利用状況の調査、アイコンの分類を主な目的としていた。調査 2 においては調査 1 と同様、大学生の Twitter 利用状況の調査及び自尊心、自己愛傾向、対人不安傾向、公的自己意識の 4 つの性格特性と自己の外見評価、自分のアイコンに対する印象、自分が他者に呈示したい印象を尋ね、アイコン選択との関連を検討した。その結果、アイコンに自分の写真を使用している協力者は自己の外見に自信や関心があり、自己愛傾向が高いということが示された。また、対人不安傾向とアイコンに対する印象・他者に呈示したい印象の関連はほとんどみられなかった。本研究より、Twitter のアイコン選択には、他者の存在を前提とする自尊心や対人不安傾向ではなく、自分自身に注目する自己愛傾向が影響を及ぼしているということが示された。

## 外国語と母語が道徳判断に及ぼす影響

### —Geipel, Hadjichristidis & Surian(2015)の直接的追試実験—

22015458 顔 海

本実験の目的は、Geipel, Hadjichristidis & Surian (2015) の第二実験の直接的な追試を行うことであった。関西学院大学の中国人留学生を対象とする実験を行った。本実験では、Geipelら (2015) が使用した道徳ジレンマのシナリオを中国語と日本語に翻訳したものを使った。仮説は「母語の場合より外国語を使うと感情が希薄化されるため、道徳判断に影響を及ぼすことになる」ということにした。各シナリオにおいて使用した言語は人間の道徳判断に影響するかどうかについて関連性を見るため、カイ二乗検定を行ったところ、有意ではなかった。そして、言語条件と実験シナリオを独立変数とし、道徳判断尺度の得点を従属変数とした $2 \times 3$ の分散分析を行ったところ、統計的に有意な差が出なかった。次に、各課題において、外国語能力と道徳判断、外国語能力と道徳判断得点の関係を見るために、相関分析を行ったところ、相関性が認められなかった。最後に、言語条件 (外国語・母語) と実験シナリオ (歩道橋問題・トロッコ問題) を独立変数とし、感情変化の得点を従属変数とした $2 \times 2$ の分散分析を行ったところ、統計的に有意な差が出なかった。この結果から、本実験はGeipelら (2015) の実験を支持しない結果となり、「母語の場合より外国語を使うと感情が希薄化されるため、道徳判断に影響を及ぼすことになる。」という仮説は支持されなかった。